

属格表現の本質的理解と指導について*

中 川 直 志

1. はじめに

属格は代名詞以外の名詞にあっては名詞に'sをつけた形態をとり、代名詞にあっては my や his など独立した形態をとる。属格は、「所有格」とも呼ばれるように、所有関係を表す格であると考えられがちであるが、文字どおりに所有を表す意味は、属格が持ついくつかの意味の一つに過ぎない。また、's を真に「格屈折語尾」と呼べるかについても疑問がある。そこで本稿においては、英語における属格表現について、統語的立場から再分析するとともに、そのあるべき指導について考察する。

2. 属格の基本 6 タイプ

本節においては、Huddleston and Pullum (2002) に基づき、属格表現をその機能に従って 6 種類に分け、それぞれの機能について概観する。その上で、「所有格」とも呼ばれる属格に対する一般の基本認識について検証する。

Huddleston and Pullum (2002: 467) によると、属格はその機能や形式によって、次の 6 タイプに分けられるという(以下の Huddleston and Pullum (2002)からの引用における和訳は寺田他(2019)による)。

(1) a. [Kim's father] has arrived. [タイプⅠ：主語兼決定詞]

(キムの父親が到着した)

b. No one objected to [Kim's joining the party]. [タイプⅡ：動名詞節の主語]

(キムがパーティに参加することに誰も反対しなかった)

c. Max's attempt wasn't as good as [Kim's].

[タイプⅢ：主語と決定詞と主要部を兼ねる融合形]

(マックスの試みはキムの試みほどよくなかった)

d. She's [a friend of Kim's]. [タイプⅣ：斜格属格]

(彼女はキムの友人です)

e. All this is Kim's. [タイプⅤ：叙述属格]

(これはすべてキムのものです)

f. He lives in [an old people's home]. [タイプⅥ：限定属格]

(彼は老人ホームで暮らしています)

(Huddleston and Pullum (2002: 467))

タイプ I の属格名詞は、決定詞と主語の機能を兼ね備えているといわれる。決定詞とは、a や the のように、名詞の前に現れて名詞句の定性（名詞句が表すものが特定できるか否か。a ならば「不定」、the ならば「定」。）を表す要素である。タイプ I の属格名詞の前には決定詞が現れない（*the Kim's father）ことから、このタイプの属格は決定詞の役割をはたしており、その解釈は a father of Kim（キムのとある父親）ではなく the father of Kim（キムのほかならぬ父親）となる。また、このタイプの属格名詞句とそれが修飾する名詞句、つまり属格名詞句が含まれる大きな名詞句の母体となる名詞（以下、「主要部名詞」）の意味関係は、動詞によって表される主語と目的語の関係と平行的であり、その動詞は、(3)に示されるように、必ずしも所有を表すとは限らない。

(2) a. Mary's green eyes （メアリーの緑の目）

b. Mary has green eyes. （メアリーは緑色の目をしている）

(3) a. Mary's book （メアリーの本）

b. Mary writes a book. （メアリーは本を書く）

(ibid.: 474)

このタイプの構造上の特性としては、属格名詞句それ自体が名詞句としての独立性を有していることが挙げられる。例えば、this company's computers（この会社のコンピューター）においては、this が computers ではなく company を限定しており、名詞句 this company's がより大きな名詞句である this company's computers の中にある限定語として機能している。the people next door's behavior（隣人のふるまい）のように属格名詞句自体が複数の語から形成されることも、このタイプの属格名詞句が独立した名詞句としての構造を有していることを支持する。この場合、属格の標識である's は属格名詞句の中心となる語（people）ではなく、属格名詞句の最終要素（door）に付されている。

タイプ II においても、属格が表す機能は名詞化した joining の所有者ではなく、名詞化する前の動詞 join に対する主語である。さらに、このタイプの属格名詞句が含まれる（動名詞を主要部名詞とした）名詞句は、動名詞が直接目的語をとっていることがからもわかるように、全体として節構造を有していると考えられる。したがって、このタイプの属格名詞句の機能は純粹に主語としてのものであり、タイプ I のような決定詞としての機能は含まれない。このことは、このタイプの属格名詞句が目的格名詞句で置換可能であることから支持される。(4)において Kim は join に対する主語として機能しており、その格は目的格である。

(4) No one objected to Kim joining the party.

(キムがパーティに参加することに反対する人はいなかった)

(ibid.: 468)

タイプⅢは、タイプⅠの属格名詞句が主要部名詞句と融合したものと考えることができる。したがって、(1c) における Kim's は Kim's attempt を意味し、Kim は attempt が意味する行為に対する主語として機能している。このことは単なる意味の問題ではなく、Kim's は Kim's attempt の構造も受け継いでいると考えられる。次の例を見れば明らかであろう。

(5) a. Only one of Ed's attempts was successful, but [both Kim's] were.

(エドの試みのうち 1 つだけが成功したが、キムのは両方とも成功した)

b. Ed's production of 'Hamlet' was more successful than [Kim's of 'Macbeth'].

(エドによる「ハムレット」の演出はキムによる「マクベス」のそれより上手くいった) (ibid.)

(5a) においては both が、(5b) においては of 'Macbeth' が属格名詞句の前後に現れているが、これらは属格名詞句そのものを修飾しているのではなく、属格名詞句に融合された名詞句 (attempt) を修飾していると考えられる。つまり、(5a) においては「両方のキム」ではなく「両方の試み」が正しい解釈であり、(5b) においては、「マクベスのキム」ではなく「マクベスの演出」が正しい解釈である。したがって、このタイプの属格名詞句はそれが限定する主要部名詞句と融合し、その結果主要部名詞句が外見上見えなくなっているものの、頭の中での認識では独立して存在していると考えられる。

タイプⅣは、一般に「二重属格」と呼ばれる形式である。「二重」と呼ばれるのは of を属格の標識とみなし、それに続く属格名詞句とあわせて属格が二重に標示されていると考えるからである。タイプⅠの属格が決定詞の位置を占め、名詞句を定名詞句として標示するのに対し、二重属格を含む名詞句においては、属格名詞句とは別に決定詞が名詞句全体の決定詞の位置を占めることが可能である。以下の例を比べてみよう。

(6) a. *a Kim's friend

b. a friend of Kim's

(7) a. *those Kim's friends

b. those friends of Kim's

(ibid.: 469)

ただし、決定詞 the が現れ得るかについては条件がある。

(8) a. Kim's friend (キムの友人)

b. *the friend of Kim's

(9) a. ?Kim's friend that I met in Paris (私がパリで会ったキムの友人)

b. the friend of Kim's that I met in Paris

(ibid.)

通常、(8b) に示すように二重属格を含む名詞句に the が現れることはなく、(8a) に示すようにタイプ I の属格が用いられる。これは、タイプ I の属格が決定詞を含むためより簡潔な表現になっているためであると考えられる。これに対し、(9b) に示すように、名詞句が関係詞節を含む場合には二重属格を含む名詞句に the が現れることができ、逆に、タイプ I 属格が容認されにくくなる。

all や both はタイプ I とタイプ IV の両方に現れることができるが、タイプ I では属格名詞句が決定詞を含むため修飾語と分析され、タイプ IV では決定詞と分析される。

(10) a. all/both Kim's friends (すべての／両方のキムの友人)

b. all/both friends of Kim's (ibid.)

every は、(11a) のように修飾語として機能することも、また (11b) のように決定詞として機能することもできることから、タイプ I とタイプ IV の両方と共起できることがある。ただし、修飾語としての用法は限定的であり、(12b) は容認されるが、(12a) は容認されない。

(11) a. Kim's every move

b. every move of Kim's

(12) a. *Kim's every friend

b. every friend of Kim's (ibid.)

タイプ V は主語や目的語に対応する叙述名詞として用いられる。(1e) においては属格名詞句が主語に対応しており、(13) においては目的語に対応している。

(13) a. Let's call it Kim's. (それをキムのものと呼ぼう)

b. I regard it as Kim's. (私はそれをキムのものとみなす) (ibid.)

タイプ V はタイプ III と形態上の違いがなく、また、タイプ III も叙述名詞として現れることができるため、両者を区別する必要があるのかが問題となるかもしれない。しかし、両者は異なるタイプであると Huddleston and Pullum は分析している。次の例を観察しよう。

(14) Everything that is mine is yours. (私のものはすべてあなたのものだ)

(ibid.)

(14) において、yours を「属格名詞句と主要部名詞の融合形」とみなす根拠は乏しいと考えられる。(14) において yours の後に everything that is mine を補っても論理的に適切な解釈は得られないからである。

タイプ VI は、(1f) に例示したように、冠詞の後に現れて名詞を修飾する。このタイプの属格が修

飾要素であることは、(1f)において an が old people と関連付けられることなく、home を修飾することからも明らかである。修飾語としての属格には次の 2 つの下位タイプがある。

(15) 記述属格 (descriptive genitives)

- a. a glorious [summer's day] (よく晴れた夏の日)
- b. a [Sainsbury's catalogue] (セインズベリーのカタログ)
- c. a [women's college] (女子大学)

(16) 度量属格 (measure genitive)

- a. [an hour's delay] (1 時間の遅れ)
- b. the [one dollar's worth of chocolates] he bought
(彼が買った 1 ドルの価値のチョコレート)

(ibid.: 470)

記述属格は生産性がいくらか下がる。たとえば、a ship's doctor (船医) とはいうが、[#]a school's doctor とはいわない (# は意味的あるいは語用論的に容認されにくいことを示す)。この場合、a school doctor (校医) という。記述属格が特定の意味に限定されないのに対して、度量属格は時間的長さや価値といった度量衡に限定して用いられる。それゆえ度量属格では、時間的長さを表せるが、空間的距離を属格で表現して *They had [a mile's walk]. (彼(女)らは 1 マイル歩いた) と言うことはできない。度量属格のうち、価値を表すものは価値の属格、時間を表すものは時間の属格とよばれる。価値の属格が名詞 worth を主要部名詞としてとる一方、時間の属格は意味的に適合すればどんな名詞でも主要部名詞としてとることができる。

本節においては、英語における属格表現の具現パターンについて概観した。これを受けて次節では、「所有格」に対する一般的な理解に潜む問題について考察する。

3. 「所有格」に対する一般的な理解と潜在する問題

「所有格」という呼称は「属格」よりも一般にはより広く浸透した呼称であると言えるであろう。そして属格に対する一般的な理解のある側面をよく示しているといえよう。それは次の 2 点である。

(17) a. 属格は所有関係を表す。

- b. 属格 ('s) は「格語尾」である。

しかしこれらのいずれも的確とはいいたところがある。まず (17a) であるが、属格の表す意味が少なくとも厳密な意味での所有でないことは、一般の学習者も感じているところであろう。そして、そのような用例に気づいた時はおよそ、所有の概念を拡大解釈していると思われる。しかし、そのような理解が構文の正しい分析を阻害する可能性もある。前節においてタイプ II と分類された動名詞の

主語としての用法を所有の意味に還元していたのでは、(1b) (18)として再掲)で示したような「動詞的動名詞句」が節構造を有していることを理解するのは難しい。

(18) No one objected to [Kim's joining the party]. (ibid.: 467)

これに対しては伝統的に、「動名詞の主語は所有格で表す」と暗記することを求められることも少なくない。しかし、この指導も絶対的なものとして受け入れることはできない。(4) (19)として再掲)に示したように、動名詞の主語は目的格で表されることもあるからである。

(19) No one objected to Kim joining the party. (ibid.: 468)

(19)において「反対」の対象となっているのは Kim 自身ではなく Kim が「パーティに参加すること」であり、したがって Kim は格こそ目的格であるが、意味的には動名詞の主語である。「動名詞の主語は所有格で表す」という理解に固執する学生のなかには(19)を容認しようとしめないケースも散見される。

次に (17b) である。英語の名詞はその歴史的発達の中で属格以外の語尾をすべて消失していった。なぜ属格語尾のみが生き残ったかについては今なお議論が続いているが、その一方で、属格語尾が屈折語尾としてのかつての特性をそのまま維持しているとはいえない。さらに言えば、現代英語の'sを屈折語尾とみなすことすらできないといえる。その一つの証拠が「句属格」の存在である。

(20) the king of England's daughter (ibid.: 479)

(20)は「イングランド王の娘」を意味するので、's が本来付着すべきは king であって England ではない。したがって現代英語の'sは名詞の格語尾（屈折語尾）というよりは名詞句全体に付着する標識とみなすべきであろう。

このことはドイツ語の属格表現との比較からも支持される。

(21) die Pfote des Hundes (その犬の足)

ドイツ語の属格名詞句は主要部名詞句に後続する。ここで注目したいのは、属格名詞句 des Hundes にあっては名詞だけでなくそれに先行する定冠詞 der も属格形になっていることである。ドイツ語では現代でも定冠詞が格変化する。(21)はドイツ語の格語尾があくまでも屈折語尾としてそれが形態的に付着すべき相手に対して付着することを示している。これに対して現代英語の'sは付着すべき相手を屈折語尾として形態的に探すのではなく、属格名詞句全体を取り出し、それに対する標識としてその最後に現れる名詞に付着するのである。このような属格語尾に対する再分析は、ドイツ語こそ屈折語尾としての属格を保持しているが、他の多くのゲルマン系言語にもみられることである。

以上の議論から、(17a,b) はいずれも的確とは言い難いことがわかる。それではどのような理解が必要なのであろうか。(17b) については's が格語尾であろうと標識であろうと's であることに変わらないので、's が付着する相手を的確に定義することによって標識としての認識は得られようと思われる。ただし、's を単に「名詞句全体に付する標識」とだけ規定したのでは、's の重要な機能を認識することができない。前節で概観したように、タイプIVとタイプVIを除いて、属格名詞句が冠詞と共に用いられることはない。これは Huddleston and Pullum がタイプ I を「主語兼決定詞」と呼んだことから分かるように、属格名詞句が冠詞の機能も含んでいるからであるが、その源泉は's である。's が冠詞のような決定詞と機能を共有していることはどのように保障されるのであろうか。また一部の例外を除いて統語的に両者が共起しないことは、統語構造において保障されなくてよいのであろうか。言い換えれば、機能を共有する両者が統語構造上全く関係のない位置に置かれているとすれば、文法システムとしてかなり非効率なのではなかろうか。両者はその決定詞としての機能にふさわしい位置を保証されるべきであろう。's に決定詞としての機能を保証しただけでは属格名詞句の前位置は統語構造上空白として残る。そのような直観を有した学生がそこに冠詞を入れてしまう間違いは後を絶たない。

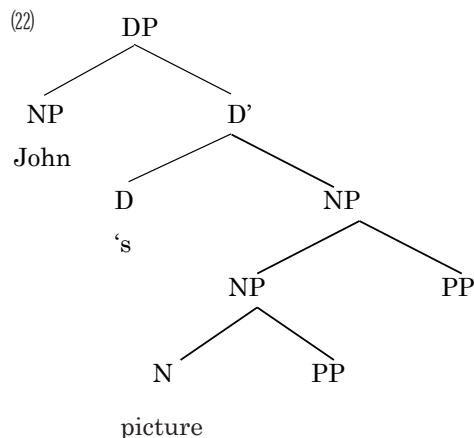
(17a) についてはどうであろうか。「所有」あるいは「属」といった概念を「主語」あるいはそれに相当する概念に置き換えることが想定されるが、属格名詞句が主語であることが統語構造上もある程度保障されないのであれば、ただの拡大解釈に終わってしまう。そもそも、's の拡大解釈が容認されるのはなぜなのだろうか。

次節においては、これらの問題に対する解決策となりうる可能性のある、生成文法の枠組みからのアプローチについて概観する。

4. DP 分析

本節においては、名詞句に対する「DP 分析」と呼ばれる構造分析を概観し、それが前節で指摘した問題にどのような解決策をもたらすのか考察する。

Abney (1987) は属格名詞を含む名詞句の構造を(22)のように分析した。



(22)において特筆すべきは、's を決定詞句 (Determiner Phrase (DP)) の主要部として独立させたことであり、その補部に裸名詞句を配置することで、属格名詞句を含む名詞句全体の主要部が D であるとしたことである。つまり名詞句が現に名詞句であるのは語彙の意味の中心となる名詞句 (NP) ではなく、決定詞に由来するというのである。一見これは不可解に思われるかもしれないが、実は理にかなっている。例えば play という語はそれだけでは動詞なのか名詞なのか区別がつかないが、その前に冠詞や属格名詞がつくことにより名詞であることがわかる (同様に、play に対して時制要素などが付けば動詞であるとわかる。))。

上記の分析により前節で提起した問題はどのように解決されるのだろうか。まず、D が統語構造上独立した位置づけを与えられたということは、's が統語的に名詞句と結びつくことを示唆する。つまり's は、「屈折語尾」として名詞に付着した状態で統語派生に導入されるのではなく、属格を示す標識としてその前の名詞句全体に対して統語派生の過程で付着する。したがって、DP の指定辞位置に複数の語からなる名詞句が現れることも不思議はない。(20)においては the king of England が DP 指定辞位置 (22)において John が現れている位置) にあるので、's は king ではなく名詞句の最終要素である England に付着している。また、D はその名が示唆する通り冠詞が入る位置でもある。すると D の位置 (主要部位置) は 1 つしかないので、属格名詞句と冠詞が共起することはできなくなる。以上により (17b) の仮説が提起した問題が解決される。

(17a) が提起する問題はどのように分析されるだろうか。(22)に例示した DP 構造において D に指定されている機能は決定詞としてのそれ以外にない。つまり、D そのものに所有の意味は指定されていない。's はある意味、その指定部にある名詞句と補部にある名詞句を構造上関連づけているだけであり、指定部や補部がそれぞれの構造的な位置そのものに由来するものとして有している機能 (つまり、それに続く内容を限定したり、主要部の意味を補う機能) 以外に、関連の内容について何も指定していないのである。したがって、その関連が「指定部と主要部と補部の構造上の関係」とおよそ矛盾しない「主語と動詞と目的語の関係」が幅広く属格構造にも反映できると考えられる。

決定詞と's の相補的な関係を決定詞としての機能の共有に求めるのではなく、構造上の位置の共有に求めることには実質的な利点もある。(6b) や (7b) ((6-7) を (23-24) として再掲) に示したように、タイプ IV では属格名詞句を含む名詞句全体に冠詞が付される可能性がある。

(23) a. *a Kim's friend

b. a friend of Kim's

(24) a. *those Kim's friends

b. those friends of Kim's

名詞句の中で冠詞 (決定詞) と属格名詞が共起できないと一概に規定したのではこの事実を説明することはできないが、(23b) と (24b) において主要部名詞 (friend/friends) の前に's はないので、構造上冠詞の生起は問題ではなくなる (ただし、定冠詞は具現できない ((8b)) ので決定詞として

の機能も完全には無視できない。)

ここまでの説明で一見問題となりそうなのが、タイプ VI である。(15-16) ((25-26) として再掲) においては属格名詞が冠詞と共に起している。

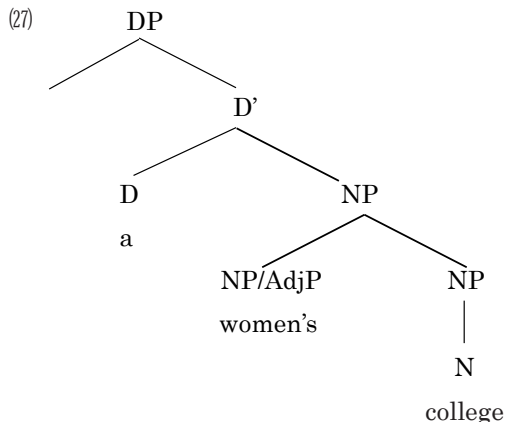
(25) 記述属格 (descriptive genitives)

- a. a glorious [summer's day] (よく晴れた夏の日)
- b. a [Sainsbury's catalogue] (セインズベリーのカタログ)
- c. a [women's college] (女子大学)

(26) 度量属格 (measure genitive)

- a. [an hour's delay] (1 時間の遅れ)
- b. the [one dollar's worth of chocolates] he bought
(彼が買った 1 ドルの価値のチョコレート)

しかし、(25-26) における属格名詞の意味を考えると、それらが決定詞としての機能を有しておらず、形容詞として機能していることがわかる。したがって、詳しい構造分析は控えるが、それらの属格名詞句は構造上 DP の指定辞位置や主要部位置にあるのではないと考えられる。



(27)において women's が現れている位置 (NP 付加位置) に community や famous といった形容詞的用法の名詞句や形容詞が現れうることもこの分析を支持すると考えられる。

本節においては、前節で提起した問題に対して DP 分析が一貫して理に適う説明を提供できる可能性あることを示した。ここまでの議論が概ね妥当であるとすれば、「属格」や「所有格」という呼称は (それらが慣習的に定着しているため呼称の変更が実質的に困難であるとしても) その本質的意味を改めて問い直されなければならないであろう。's は本質的に「格」でもなければ「属/所有」でもない可能性がある。とりわけ英語においては ('s が格語尾でないとすれば)、人称代名詞や wh 句

を除き格が形態的に標示されることはないことになる。であるとすれば、「格」はどのような概念に基づいて定義すればよいのであろうか。また、属格を「所有」といった意味に結び付けることも不適切だが、それを「主語」に関連づけるとすれば「主格」との違いはどう説明すればよいのであろうか。これらの問題について考えることは、「そもそも格とはどのようなものなのか」、「それぞれの格のタイプ（呼称）は何と関連づけられなければならないのか」といった、格の本質を問い返すことにつながる。そこで次節においては、格の本質的な定義や呼称がどうあるべきかについて、属格以外の格にも議論を広げて考察する。

5. 格の定義と呼称に潜在する問題

5.1. 格と意味・機能

名詞の格 (case) とは、節や句の構造において、名詞がその中心となる語（主要部）とどのような関係にあるかを示す用語である。人称代名詞と疑問代名詞 (who、whom) においては格が語形に表示される（これを「形態格」と呼ぶ）。(28)は人称代名詞の例である。

(28) a. I slept soundly. [節の主語 主格]

b. Please help me. [節の目的語 対格]

c. Where is my bag? [名詞句の主語兼決定詞 属格] (ibid.: 455)

(28a-c) において、I は動詞 slept の主語であり、me は動詞 help の目的語であり、my は my bag という名詞句の中で所有者を示している。英語においては、人称代名詞と疑問代名詞以外の名詞において格の違いが語形によって表示されることはないが、名詞句はすべて現れる位置によって目には見えない格が付与されていると考えられる（このように付与される格を「抽象格」と呼ぶ。）。

ここで注目すべきは「主語」や「目的語」といった概念が「所有」といった「意味」ではなく「機能」を表しているということである。(28c)の括弧内に示した Huddleston and Pullum (2002) の呼称も機能に基づいている。先に述べたように、「所有」は主語兼決定詞としての属格が持つ意味の一つに過ぎない。ただし、機能に基づく定義も実は容易ではない。具体的に観察しよう。

「対格」は厳密には直接目的語を指す用語であるが、英語においては、間接目的語にも同じ語形が用いられるため、間接目的語の格（「与格」）と対格を総称して「目的格」と呼ぶこともある。

(29) a. We took him to the zoo. [直接目的語としての対格]

b. We showed him the animals. [間接目的語としての対格] (ibid.: 457)

このように述べると、格は専ら機能を示すと思うかもしれないが、名詞が持っている格と機能が必ずしも一致するとは限らない。以下に示すように、主格は主語としての機能に限定されない。(30b)

に付されている%は方言によっては容認可能であることを示す。

(30) a. It was I who found it. (それを発見したのは私です)

b. %They've invited Kim and I to lunch.

(彼(女)らはキムと私を昼食に招待した)

(ibid.: 456)

(30a)において、Iは主格であるが補語として機能し、(30b)においてIはinvitedの目的語の一部となっている。また、対格が主語の機能をはたすこともある。

(31) a. Kim objected to him being given such preferential treatment.

(キムは彼がそのような特別待遇を受けることに反対した)

b. For him to go alone would be very dangerous.

(彼が1人で行くことはとても危険であろう)

(ibid.)

(31a)において、Kimが反対しているのは「彼」ではなく「彼がそのような特別待遇を受けること」である。つまり、(31a)におけるhimは形態的には対格であるが、object toの目的語ではなくbeingの主語として機能している。また(31b)においても、himは不定詞to goに対する主語として機能しているが、前置詞forに導かれているため、格としては対格をとっている。

ここで格の定義に関わる概念について整理しておこう。まず、「格」とは文や句の構造における位置に基づいてすべての名詞句に付与されるものであり、それが形態に反映されなくても「抽象格」が付与されていると考えられる。その一方で、「主語」や「目的語」といった機能と「格」の対応は必ずしも一貫したものではなく、主格が主語として機能しなかったり、対格が主語を標示したりすることもある。したがって「機能」という概念と「格」という概念を一律に結び付けると誤解を招く恐れがある。

要するに、格の正確な定義は構造上の位置のみに基づくほかないと考えられるが、これには反論があるかもしれない。位置によっては主格と対格のどちらが選択されるかが明確になっていない場合もあるからである。(32)を例に考えてみよう。

(32) a. It is I who love you. (あなたを愛しているのは私です)

b. It's me who loves you.

(ibid.: 459)

(32)は、主語に対する補語の位置に主格と目的格のいずれも現れ得ることを示している。しかし、位置によって主格と対格の選択が曖昧になる場合があるとはいえ、格が構造上の位置に基づいて決定されることに変わりはないことに注意したい。(32b)がよい例であろう。(32b)においては、対格のmeが主語を叙述する補部として現れているが、この格は叙述の対象となっている主語の格(主格)とは

異なる。現代英語よりも豊かな形態格の体系を有する言語においては、補部と主語の間に格の一致がよくみられ、これは古い時代の英語においても確認されている。しかし、現代英語においてもそのような一致があるとは考えられないことを (32b) の *me* は示唆している。*me* はあくまでその位置で対格を付与され得るから対格なのであり、(32a) の補部位置にある *I* も主語との一致の結果として対格になっているのではない（ただし、人称、数、性の一致は起こる）。つまるところ、「格」は位置によって決定されるが、機能と位置の関係は一貫しないので、本質的には、「格のタイプが特定の機能と一義的に関連づけられる」とは言えないのである。

5.2. 二重属格

同様のことを属格でも具体的に確認しよう。(1)に示したタイプIVは一般的には「二重属格」として知られるが、この呼称が意味していることについては批判的考察の余地がある。一つは「*of* の意味機能」にかかわる問題であり、もう一つは「格が二重に付与される」ことにかかわる問題である。

まず前者の問題である。「二重属格」という呼称の背景にあるのは、*of* に後続する名詞だけでなく *of* そのものが属格を標示しているという考え方であるが、そのような考え方には的確とは言い難いところがある。先にも述べたように、属格が意味する関係は *of* が表す様々な意味関係の一つにすぎない。したがって、*of* が属格的な意味を表すことがあるとはいえるが、「属格」標識であるというのには無理がある。つまるところ、「所有」という概念を格に結び付けること自体に無理があるのである。前節において「機能」を「格」と結びつけることの困難さを指摘したが、「所有」はさらに個別的な「意味」である。このような概念をも文法（あるいは統語分析）に持ち込むのは文法を混乱させる可能性がある。呼称として分かりやすいとしても、その本質が必ずしも「所有」や「属」に限られないことは十分に認識しておく必要がある。

後者の問題はどうか。 *of* が属格標示を行っていないとしても斜格を標示していると考える可能性は残されている。 *of* に後続する名詞は本来斜格（主格と呼称以外の格の総称。）であるからである。現に、Huddleston and Pullum は「二重属格」を「斜格属格」と呼んでいる。もっとも、「二重属格」であろうと「斜格属格」であろうとそこに「格の重複」が含意されていることに違いはない。しかし、「何に対して格が二重に付与されているのか」を精査してみるとこのような考え方にも問題が明らかとなる。(3) (= (1d)) を例に考えてみよう。 *of Kim's* の部分が斜格属格である。

(3) *She's [a friend of Kim's].*

(ibid.: 467)

「*of* が *Kim* に斜格を付与しており、*Kim's* 自体も属格」であるため「二重」と捉えられるのだが、*of* が斜格を付与しているのは正確には *Kim's* であって *Kim* ではない。つまり、*of* が斜格を付与しているのは「*Kim* の友人」である。これに対し *Kim* は *'s* によって格を付与されている（4節のDP分析を参照）。すると、*of Kim's* にあって2重に格付与されている要素は存在しないということになる。

これは斜格属格における属格形が元々所有代名詞から発達したと考えられることから明らかであ

ろう。二重属格がどのように発達したかについては諸説あるが、「of+ 属格名詞」という形式（例：a friend of John's）が現れる前に「of+ 属格代名詞（所有代名詞）」という形式（例：a friend of mine）が出現しており、このことは二重属格における属格名詞が単純な属格形というよりも、属格名詞と主要部名詞の融合形と見なせる可能性を示唆している。つまり、of が格付与しているのは「Kim 自身」ではなく、「Kim の友人」である。

そもそも、特定の機能と一義的に関連付けられるわけではないとはいえ、格は何らかの文構造上の機能を有しているのであるからそれが二重に付与されていると考えることそのものに無理があるともいえる。Kim が斜格と属格の両方を付与されているとすれば、構造解析はきわめて困難となる。つまり、属格も位置のみに基づいて決定される他ないのである。これに対しても歴史的裏付けがある。句属格の歴史的発達を概観してみよう。

5.3. 句属格

属格語尾が屈折語尾としての地位を守っていた古英語において、句属格の前身となる古英語の構造は(34)に示す2つのタイプであった。

(34) a. 属格名詞+属格名詞+主要部名詞

Ælfredes cynings godsunu (=king Alfred's godson)

(ChronA 82, 10 (890); 小野・中尾 (1980: 292))

b. 属格名詞+主要部名詞+属格名詞

Ælfredes sweostor cyninges (=king Alfred's sister)

(ChronA 82, 2 (888); *ibid.*)

(34)においては主要部名詞に対して複数の属格名詞が現れており、(34b)においては、(2)で観察したような、属格名詞が主要部名詞に後続する構造が見られる。これらは古英語における属格語尾が形態的に付着していたことを示唆する。しかし、中英語期に入ると、(34a)タイプにあっては先頭の属格名詞から、(34b)タイプにあっては最後尾の属格名詞から属格形が消失し、さらに(34b)タイプで属格形を失った最後尾の名詞は of 属格（この呼称も二重属格を議論した時と同様の問題をはらんでいる）に取って代わられた。そして14世紀に入り、of 属格が主要部名詞の前に移動して、現代英語の句属格構造が現れるようになった。

これが意味することは何であろうか。文の要素間の関係を示す格語尾が衰退した結果、要素間の関係は語順で示す他なくなった。その結果、属格名詞句は主要部名詞の前位置に固定され、さらにその結果として、属格名詞に DP 分析が適用されるようになり、's はその標識として属格名詞句全体に付着するようになった」と考えられる。つまり、主要部名詞を含む名詞句の構造全体における位置（D 主要部とその指定部）が属格としての位置づけを決定づけるようになったと歴史的にも分析できるのである。

屈折語尾でなくなった'sが主要部名詞に対する決定詞としての役割（冠詞や指示代名詞に相当）を担うようになったことも見逃せない。属格名詞が主要部名詞の前位置に固定されただけであれば、属格名詞の前に冠詞や指示代名詞のような決定詞が現れたりしても不思議はない。現に古英語においては、(35a) や (36a) に示すような、決定詞と属格名詞がともに主要部名詞に先行する語順が容認されていた。

(35) a. *a Kim's friend

b. a friend of Kim's

(36) a. *those Kim's friends

b. those friends of Kim's

(Huddleston and Pullum (2002: 469))

しかし、属格名詞が主要部名詞の前位置に固定され、その結果 DP 分析が適用されるようになると、's は冠詞と D 主要部において競合関係に入ることになる。その結果、現代英語の's は決定詞としての機能も有することになったと考えられる。

本節においては、「属格」や「所有格」という呼称に潜在する問題を足掛かりとして、格がいかなる情報に基づいて決定されなければならないか考察した。英語において、格は統語構造上の位置に基づいて決定されなければならない、そのタイプを特定の機能と一義的に関連付けることはできない。まして「属」や「所有」は意味的概念であり、格と結びつくと「二重属格」に見られるような（ある意味での）誤解を生むことになる。これは歴史的にも裏付けられることであり、DP 分析は現代英語における'sの役割を適切に示しているといえよう。

次節においては、属格の指導上の留意点に対して、ここまでの考察の結果をいかに落とし込むか考察する。

6. 指導上の留意点

「属格」や「所有格」に対する一般的な理解に潜在する問題が明らかであるとすれば、その理解を支えてきた指導についても一定の工夫や配慮が必要になるであろう。本節においては、次の点についてどのような指導上の留意が必要か考察する。

(37) a. 属格名詞と決定詞（冠詞や指示代名詞等）の相補性

b. 属格が決定詞と共起する場合

c. 属格名詞の主語としての機能

d. 属格名詞を含む名詞句内の語順

まず、(37a) である。これについては、属格名詞と決定詞が基本的には位置を共有しているため、両者が共起できないことを認識させることが必要になる。DP 分析を持ち出すことはできないが、名

詞句内で主要部名詞の前に現れる要素の語順「決定詞 — 形容詞 — 名詞」を提示し、その中で決定詞の位置に属格名詞を位置づけるのも一策であろう。Mary's wonderful picture のような例を提示して、Mary's が a wonderful picture の a と同じ位置にあることを認識させたい。問題は、「Mary のすばらしい 1 枚の絵」などのように、どうしても冠詞を付けたいくなるケースであるが、そのような際は「リスクを冒すことなく」、a beautiful picture of Mary/Mary's のように、of 属格あるいは二重属格を用いることができることも指導したい。これにより属格名詞と決定詞の相補性に対する認識も深められるであろう。

上記が成功すれば逆に問題となるのが (37b) である。4 節で述べたように、これは属格名詞句が形容詞として機能するケースであるので、その形容詞性を認識させる必要がある。例えば (38a-c) を対比させるなどして、このタイプの属格名詞句が形容詞と同様に、特定の指示を持たず、種類などを広く指示していることを認識させたい。

- (38) a. a women's college
- b. a community college
- c. a famous college

次に (37c) である。「所有」に比べれば「主語」という概念の方が抽象的であり、そもそも「主語」の定義そのものが困難であることは周知の事実である。であるとすれば、所有の概念を拡大解釈していた方がまだましなのではないかという議論が出てもおかしくない。しかし、属格名詞句が主語的な特性を帯びることを知っておくことが理解を深めることもある。(37d) の問題も合わせて以下で具体的に考察したい。

主要部名詞が普通の名詞である場合、(39) に示す階層において上位にある名詞、あるいは同じ階層にある名詞が先に現れる傾向がある (Hawkins (1981))。

- (39) a. 人間を表す名詞
- b. 身体部位などの人間の属性を表す名詞
- c. 人間以外の有生物を表す名詞
- d. 無生物を表す名詞

例えば「John の車」であれば、John's car は容認されるが *the car of John は容認されない。また「机の脚」であれば、the leg of the desk は容認されるが *a desk's leg は容認されない。これはどのように分析できるであろうか。

主要部名詞が動詞などから派生された名詞である場合、元となった動詞との関係が語順に反映される傾向がある。主要部名詞が自動詞から派生されていれば、属格名詞と of 属格のどちらが用いられなくても構わない (John's decision、the decision of John) が、主要部名詞が他動詞から派生された場

合、属格名詞が主語に対応し、of 属格が目的語に対応する傾向がある。例えば、「John による発見」は John's discovery とするのが一般的で、「(John が発見されたという意味で) John の発見」という場合は the discovery of John とするのが一般的である。当然、主語も目的語も表す場合は John's discovery of the car (「John によるその車の発見」) となる。

この傾向は DP 構造における指定部と補部の関係から導くことができる。DP 構造が指定辞と補部を's が関連付ける構造になっていることは 4 節で示した通りであり、これは文構造における主語と目的語の位置関係と平行的である。つまり、主語は述部に対する指定辞位置 (TP 指定辞位置) に現れ、目的語は補部位置 (VP 補部位置) に現れる。体系的に指導することは難しいかもしれないが、主要部名詞の前に現れる要素 (DP 指定辞位置にある要素) が動詞の前に現れる要素 (TP 指定辞位置にある要素) と同様の役割をはたすことを認識させることができれば、(37) のような配列のルールを丸暗記する必要性をある程度減らすことができるであろう (動詞派生名詞の項構造が基体となる動詞の項構造を反映していることについては伊藤・杉岡 (2002) に詳しい)。

7. まとめ

本稿においては、属格表現に対する一般的な理解に潜在する問題を取り上げ、属格表現に対する的確な理解や分析、そして、その指導のあり方について考察した。's を「格語尾」と位置づけることは現代英語において適切ではなく、また、「属」や「所有」といった意味的概念を格に結び付けることも's の本質的理解を妨げる可能性がある。これを踏まえ、生成文法における DP 分析が現代英語の属格名詞句の機能やそれを含む名詞句全体の構造に対して的確な説明を提供できることを示した。その上で指導に当たっては、's と決定詞が位置を共有していること、決定詞と共に起する属格名詞句が形容詞であること、文構造と DP 構造が平行的であること、を認識させることが有益であることを示唆した。

* 本稿は、文化科学研究所「英語学と英語教育」研究グループ 2023 年度第 1 回研究例会 (2023 年 9 月 22 日) において発表した原稿に大幅に加筆修正を加えたものである。

参考文献

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』, 研究社, 東京.
小野茂・中尾俊夫 (1980) 『英語史 I』, 大修館書店, 東京.
寺田寛・中川直志・柳朋宏・茨木正志郎 (訳) (2019) 『名詞と名詞句』, 開拓社, 東京.
Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspects*, Doctoral dissertation, MIT.
Howkins (1981) "Towards an Account of the Possessive Constructions: NP's N and the N of NP," *Journal of Linguistics* 17, 247-269.
Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge University Press, Cambridge.